

# 保育者養成課程で学ぶ「専門学校生」の 実習への想いに関する研究 ——実習を通しての意識の比較——

The study for wills about practical training who study  
child-care at the vocational school:  
A comparison on awareness through practical trainings

井口 美和・渡邊 舞

Miwa Iguchi, Mai Watanabe

## はじめに

保育者養成校に学ぶ学生にとって、幼稚園実習は学内での学びを基に、実際の実習現場で、幼児・保育者から多くを学ぶ貴重な機会であり、併せて進路選択にもつながる自己意識の確認の場でもある。実習に向かう学生の不安は、筆者（井口, 2019）<sup>1)</sup>も過去の研究で考察している様に明白である。しかし、過去の取り組みでは、「データ収集や考察は、数値に注目してのものであった」ことと、「データ収集後の、不安の軽減のための具体的な援助をする場の確保が難しい」事などを考慮して、データ収集の時期と内容の改善を図り、考察を深めたいとの思いから今回の研究に臨んだ。本研究では、調査時期を再考すると共に、実習前から実習後に至る縦断的な調査を実施し、個々人の不安の推移と実習への想いに関する自由記述に注目し、実習への不安を軽減する考察を行う。

## 方 法

### 調査協力者・調査日時及び調査方法

北海道内の2年制保育者養成専門学校の2年生（17名；男性2名・女性15名）に対し、3回の質問紙調査を行った。第一回目（以後3月と表示）は、2022年3月下旬の教育実習事前指導1の授業終了時に、第二回目（以後5月と表示）は2022年5月下旬の教育実習事前指導2終了時の実習直前に、第三回目（以後6月と表示）は2022年6月下旬教育実習終了直後にアンケートにて調査を行った。

過去の実習不安への調査は、実習直前と実習直後に行っていたが、実習へ向かう前に不安解消への指導や援助ができる様に調査時期を早め、調査1を3月に実施した。

### 調査アンケートの内容

アンケートの内容は前回<sup>2)</sup>同様に「1. 実習に対する意欲「教育実習で楽しみなこと」;「1番実践したいこと」「2番目に実践したいこと」「3番目に実践したいこと」に関する自由記述。また、実習への想い;43項目について「とても楽しみである」から「とても不安である」までの7段階で選択、回答を-3ポイント(以後Pと表記)～3ポイントに換算して集計した。

3月と5月は「不安の度合い」と「楽しみなことの自由記述」を、6月は「不安の解消度合い」と「楽しかったこと・苦しかったことの自由記述」と併せて、個の状況を把握するために、大項目毎に「自由記述欄」を設けて調査を実施。アンケート項目と集計値は表1の通りである。

表1 アンケート項目及び集計値

大項目	中項目	小項目	3月	5月	6月
コミュニケーション	対幼児	3	-1.0	-4.2	-6.4
	対保育者	2	2.1	-0.8	-2.5
	計	5	1.1	-5.1	-8.9
保育に関して	1 指導案	8	8.1	-0.8	-5.9
	2 実践	7	8.9	-0.1	-0.5
	3 援助	5	5.5	-1.8	-6.4
	4 環境の構成	3	4.1	0.2	-3.8
	5 教材教具	5	4.8	0.3	-4.3
	6 個別の配慮	3	1.5	-3.0	-5.2
絵本に関して	絵本	4	-2.0	-3.1	-1.7
その他	その他	4	2.0	0.4	-4.1

小数第一位(第二位四捨五入)で記入

### 倫理的配慮

研究協力校である専門学校には、あらかじめ調査実施に関する許可を受けた。また、調査協力者には、研究目的を説明し、回答内容はプライバシーに最大限配慮すること、協力は任意であることを教示し、同意が得られた学生から協力を得た。

## 結 果

### 1 3月・5月・6月の実習への不安意識の変化(個人集計) 表2参照

#### 1) 実習に対する不安の推移

時系列と共に、ほぼ全項目平均値がマイナスに移行しているが、3回の調査時点によって、実習への不安に差が見られるかを検討するために、不安得点を従属変数、調査時点を被験者内要因とす

る1要因の分散分析を行った。その結果、調査時点に有意な主効果がみられ ( $F(1, 16) = 40.44, p < .001$ )、3月の不安(34.2P)が5月(-13.1P)・6月(-40.8P)の不安よりも高かった。また5月の不安は6月よりも高かった。

2) 各回の内容比較

各回のアンケート集計結果を、「不安の低い人(6月は不安が多く解消された人)」とはPが平均値より高い人、「不安の高い人(6月は不安が余り解消されなかった人)」とはPが平均より低い人として、上位各3名についてPと、楽しみな事等の記入内容について比較した。

① 3月のアンケートPと記入内容 集計P123~-49  
平均値 34.2P

○不安が高い人 A123P・B92P・C76P

・「楽しみなこと；子どもと関わること・母園の様子を知りたい・特になし1名」

・「やってみたいこと；絵本を読む・手遊び・一緒に遊ぶ・子どもとのあそび・製作・手遊び」「全項目無記入1名」

○不安が低い人 D-49P・E-28P・F-19P

・「楽しみなこと；学校で先生や他の友達から学んだことを実践すること・どの様な教育をしているのか・現場の話聞くこと・子どもと関わること」

・「やってみたいこと；ペープサート・手遊び・スケッチブックシアター・ピアノ・一日全体保育」・「全項目無記入1名」

② 5月のアンケートPと記入内容 集計P123~-105  
平均値 -13.1P

○不安が高い人 A123P・G102P・H31P

・「楽しみなこと；幼児と遊ぶこと・無い2名」

・「やってみたいこと；絵本の読み聞かせ2名・手遊び2名・子どもと遊ぶ・鬼ごっこ・ピアノ弾き歌い・パネルシアター・無し」

○不安の低い人 J-105P・I-96P・K-71P

・「楽しみなこと；子どもと一緒に遊ぶこと3名・保育

表2 各時点の不安の推移

	3月	5月	6月
A	123	123	-54
B	92	27	-9
C	76	-36	-30
D	-49	-36	-35
E	-28	-60	-110
F	-19	-22	-41
G	71	102	20
H	37	31	-51
I	26	-96	-98
J	25	-105	-54
K	75	-71	-51
L	7	-59	0
M	51	22	-17
N	18	-32	-21
O	66	26	-50
P	23	-26	-42
Q	-13	-10	-50
平均	34.2	-13.1	-40.8

表3 コミュニケーション関係のP

6月	対 幼児	対 保育者	合計	P 総計
A	-7	-4	-11	-54
B	-9	1	-8	-9
C	-7	-3	-10	-30
D	-9	-2	-11	-35
E	-9	-6	-15	-110
F	-5	-3	-8	-41
G	-3	3	0	20
H	-9	-4	-13	-51
I	-9	-4	-13	-98
J	-8	-2	-10	-54
K	-5	0	-5	-51
L	0	0	0	0
M	0	-5	-5	-17
N	-7	0	-7	-21
O	-6	-4	-10	-50
P	-6	-5	-11	-42
Q	-9	-5	-14	-50
平均	-6.35	-2.52	-8.88	-40.8

小数第一位(第二位四捨五入)

園とは違い人数が多いこと」

・「やってみたいこと；絵本の読み聞かせ2名・パネルシアター・手遊び・スケッチブックシアター・部分・責任実習・幼児と一緒に歌うこと・鬼ごっこ・ストップゲーム」

※やってみたいことに大きな違いは無いが、不安の低い人は全員が「子どもと一緒に遊ぶこと」をあげている。

③ 6月のアンケートPと記入内容 集計P20～110 平均値-40.8P

○不安解消の低い人 G20P・L0P・B-9P

・「楽しかったこと；子どもとの関わり・子ども達と戸外で沢山遊んだこと・子ども達が沢山話しかけてくれたこと（無記入1名）」

・「苦しかったこと；反省会・日誌・指導案時間が足りない・設定保育・子ども達との虫取り（無記入1名）」

○不安解消の高い人 E-110P・I-98P・A・J-54P

・「楽しかったこと；水族館遠足・子ども達と園庭で遊んだこと・園外保育（バス遠足・バルシューレ）」

・「苦しかったこと；苦手な先生がいた・日誌・指導案2・○の先生と合わなかった」

※不安解消が低いグループの全員が楽しかったこととして「子どもとの関わり」をあげている。具体的に2名が保育者とのコミュニケーションの問題を挙げてはいるが、全体的に不安が軽減されている。

## 2 P総計とコミュニケーション 表3参照

P総計が平均値以下の10人中、8名は幼児とのコミュニケーション・保育者とのコミュニケーション・コミュニケーションP総計が平均値以下である。一方、P総計が平均値以上の7名中、幼児とのコミュニケーション・保育者とのコミュニケーション・コミュニケーションP総計が平均値以上は5名である。

## 3 個人のデータから 表2参照

(1) 3・5・6月の個人比較（アルファベットは前記1 1）に同じ学生）

各回の平均Pの高低により、不安が高いグループ・低いグループとした。

各個人の総合Pと平均値の比較から、3・5・6月の関連は下記の通りである。

・不安の高いグループではB・Gを含む3名が3・5・6月の全回、A・Hを含む3名が3・5月、C1名が3・6月のPが平均値以上であり、5・6月が平均値以上は0名である。このグループでは計6名が3・5月、4名が3・6月、3名が5・6月のPが平均値以上である。

・不安の低いグループではE・F・I・Jを含む5名が3・5・6月の全回、D・Lを含む3名が3・5月、1名が5・6月、1名が3・6月でPが平均値以下である。こちらのグループでは計8名が3・5月、6名が3・6月、6名が5・6月のPが平均値以下である。

(2) 特徴的な個人の事例

①「3月と6月のP差が一番大きいA」3・5月全項目不安最大、6月非常に上昇

- ・「3月123P、楽しみなこと；特に無い」「5月123P、楽しみなこと；無い」
- ・「6月-54P、楽しかったこと；子どもと鬼ごっこしたこと、苦しかったこと；無い」
- ・自由記述「コミュニケーション；子どもからよく話しかけてくれたから。子どもがどこまで自分ができるのか見守って理解した。疑問に思ったことを聞くことができた」「指導案；もう少し子どもの行動について書いたらよかった」「実践；声が小さかった」「援助；どこまで子どもができるか理解して援助できた」「環境の構成；日頃の配置を聞いて学べた」「教材教具；製作の強度が考えられなかった」「個別の配慮；特性を理解できた」

②「3月と6月のP差が一番小さいD」時系列と共にPが上昇、6月平均値以上

- ・「3月-49P、楽しみなこと；現場の話を書くこと・子どもと関わること」「5月36P、楽しみなこと；幼児と一緒に遊ぶこと」
- ・「6月-35P、楽しかったこと；自分が前に立ち、流れを作るときに、子ども達が付いてきてくれたこと、苦しかったこと；実習日誌・指導案作成に時間がかかりすぎた」
- ・自由記述「コミュニケーション；一人一人の子どもと楽しみながら関わられた」「その他の項目；無記入」

③「継続的に不安のあるB」3・5・6月共に不安Pが平均値以上

- ・「3月92P、楽しみなこと；子どもと関わること」「5月27P、楽しみなこと；幼児と一緒に遊ぶこと」
- ・「6月-9P、楽しかったこと；子ども達と戸外で沢山遊んだこと・子ども達が沢山話しかけてくれたこと、苦しかったこと；設定保育・子ども達との虫取り」
- ・自由記述「コミュニケーション；無記入」「指導案；子どもの様子を予想しきれなかった」「実践；時間配分ができなかった」「援助；無記入」「環境の構成；無記入」「教材教具；事前準備ができなかった」「個別の配慮；無記入」

④「継続的に不安のあるM」3・5・6月共に不安Pが平均値以上

- ・「3月51P、楽しみなこと；幼児と長い期間一緒に生活できること」「5月22P、楽しみなこと；毎日子どもに会って遊ぶこと」
- ・「6月-17P、楽しかったこと；子どもに声をかけてもらって一緒に遊ぶこと、苦しかったこと；子ども同士のトラブルの仲裁に入ったとき、子どもの気持を受け止め、子どもが納得できるように声をかけるなどの対応ができなかったこと」
- ・自由記述「コミュニケーション 対幼児；子どもの性格によって声かけを変える工夫が必要であることを学んだが、うまく声かけをすることができず、幼児と関わる難しさを実感した。「対保護者；無記入」「指導案；部分実習を行い、考えられていない部分や配慮できていない点があることに気付き、事前準備が不足していると思った」「実践；時間配分や子どもの注目を集める声かけを意識することができなかった」「援助；無記入」「環境の構成；無記入」「教材教具；無記入」「個

別の配慮；関わり方や伝え方が難しい子どもがいた」

## 考 察

実習の不安とコミュニケーションとの関係については、今回のアンケートでも総計Pと、幼児とのコミュニケーション・保育者とのコミュニケーション・コミュニケーション合計Pから、両者の関係を推察することができた。

今回のアンケートにおいて、コミュニケーションとの関係において、注目すべき点として、自由記述に「苦手な先生」の存在が記入されていたことである。今までのアンケートにおいても、保育者との関係が大きいであろうという予想が立ち、コミュニケーションの項目を対幼児と、対保育者に分類してきた。しかし、人間関係において「苦手」ということを明確に記入しているのは今回が初めてである。この背景として、コミュニケーションの機会の減少等のコロナ禍の様々な影響も考えられる。今後の研究ではこの点も視野に入れる必要性を考えさせられた。

### 1 3・5・6月各回の集計から

3月は、教育実習事前指導1の終了時であり、授業において全員が保育者役・幼児役になったの模擬保育終了直後の調査である。模擬保育は全員が、指導案を立案し、保育を展開し、振り返りを行う「初めての保育実践を体験する」機会である。実践後、互いの感想や意見の交流と併せて、担当教師が振り返り・指導を行っている。他教科でも指導案立案は経験しているが、実践をイメージしての立案は、かなり難しく、苦勞している様子が見られた。また、実際に保育者役になり保育を実践すると、保育展開や言葉がけにつまったり、イメージ通りに保育を進めることができなかつたり等、自身の未熟な部分への気づきの時期であった。さらに、担当教師から具体的な指導・助言を受け、様々な自己課題が見つかり、保育への不安も高まっている時期であった。そのため、実習への不安も高いと思われる。この結果から、この時期には、教育実習へ向けての学生の力を高めると同時に、自信や意欲を高める配慮がより必要な時期であると再確認させられた。

5月は、実習へ向けての多く授業をうけて、多くを学んだ実感とあわせて、実習先とのオリエンテーションを体験し、実習先での実習を具体的にイメージできるようになった事による意欲が大きく影響し、実習への期待が高まったと思われる。そのために平均値において大部分の項目がマイナスに移行している。

6月は同一項目であるが、「不安を解消できたか」という視点での調査である。こちらも全項目において平均値がマイナスに移行し、多くの学生が、多くの学びを得たことが確認できる。特に幼児とのコミュニケーションと保育に関しての各項目で不安が解消されている。この中で不安解消が低いグループの全員が楽しかったこととして「子どもとの関わり」をあげていることから、実際に関わった体験によって、不安が現実化されたのではないと思われる。一方解消されたグループは保育者とのコミュニケーションをあげながらも、楽しかったことが行事的なことであり、保育内容の深

まりは確認することができなかった。

また、6月の結果において（表2参照）、コミュニケーションの得点と総得点の関係から、今回の調査においても対幼児・保育者を問わず、コミュニケーションが教育実習全体を通しての不安の要因であり、不安を解消する大きな手立てであることが再確認された。今後はコミュニケーションの内容・程度など、様々な視点から分析していくことが必要と思われる。

## 2 3・5・6月の比較から

平均値の推移から、3・5・6月の関連は下記の通りである。

不安が平均値より高いグループ・低いグループ併せて、14名が3月と5月が同傾向、10名が3月と6月が同傾向、9名が5月と6月が同傾向である。特に、3月と5月に何らかの関連性が推察されるが、関連性を検証するためには、更なる詳細な調査が必要と考える。今回初めて、3月の実態を調査したことにより、3月の時点での不安も確認することができた。しかし、この不安が実習直前の5月には全体的に軽減されている。実習前の学生達の様子から、「実習先が決定し、オリエンテーションを経験してくる」ことにより、実習が具体的にイメージでき実習への意欲が高まってくる様子が伝わってくる。これらの事から「実習先の早期決定」により、訪問はできないまでも、ホームページの閲覧などにより、早期に実習園を知ることも、実習への意欲を高め、不安を軽減するための手立ての一つになるのではないかと考える。

## 3 特徴的な個人から

Aは、3月5月は全てが不安であり、その度合いも非常に高く、楽しみなこともない状況であったが、実習において多くの不安を解消している。特に各項目の自由記述において「子どもから」「子どもが」「子どもの行動について」「どこまで子どもができるか」と、子どもを中心に据えて振り返り子どもとの関わりからの自信が推察される。

さらに、「声小さかった」「製作の強度を考えられなかった」「声の抑揚を付けられなかった」と問題点を整理すると共に、「日頃の配置を聞いて学べた」「特性を理解できた」と成果を確認している。また、「疑問に思ったことを聞くことができた」という保育者とのコミュニケーションの良さも、学びを実感し、不安解消につながっていることが推察される。

Dは、各期共に不安が低いが、場面・事柄等の記入が乏しい事から、実習への意欲は持っているが、具体的なイメージ・内容の理解が余りなされていないことが推察される。また、実習中も様々な苦労があったにもかかわらず、6月の自由記述が乏しく、指導的な事に成果を感じている。これらの事から、実習への意識が問われる事例ではあると考えるが、実習を楽しむという、このような楽観的な姿勢も必要なのかも知れないと異なる視点から実習を考えさせられる事例である。

Bは、各期共に不安が高いが、幼児と関わることを楽しみにして実習に臨み、実際に幼児との関わりを楽しんでいるが、指導案の項のみに「子どもの様子を予想しきれなかった」と記入している。「保育実践は楽しさだけではない」という現実への気付きが実習後の更なる不安になった様子が推察



される。

Mは、楽しいこと等も項目別の振り返りも、具体的に記入されている。無記入の項目があるが、「うまく声かけをすることができず、幼児と関わる難しさを実感した。」「部分実習を行い、考えられていない部分や配慮できていない点があることに気付き、事前準備が不足していると思った」「時間配分や子どもの注目を集める声かけを意識することができなかった」と学びを確認することによって自己課題を整理することができている。この事例に示されるように、ポイントに注目すると共に実習の成果は楽しかった、できなかったではなく、具体的に「何をどの様に学んだのか」「課題はどの様なことなのか」を丁寧に振り返る視点の必要性が再確認された。

### 今後の課題

今回のアンケートから、学生達は非常に不安が強かったり、問題意識が乏しかったり、完璧主義的であったりと様々な特性をもっているが、データ上ではそれらが表れないことを再確認した。日常の関わりにおいて、それらの個人の特性を把握していることによって、幼児理解同様に点を線につなぎ、データをより深く読み取り、個に応じた不安対策や援助につなげる事が可能になる。より具体的な記述を求めることによって、想いを深く把握することが可能になっていくと考える。そのためにはより細かな自由記述等のアンケートが必要と考えるが、自由記述は回答率が低いと予想される。そのために、記述の方法や時間の確保等の配慮や、面談等の調査方法を検討・工夫・改善しながら、さらに不安を探り、支援方法等を考えて、実習へ向かう学生の援助を行っていきたい。

### 引用文献

- 1) 2) 井口美和・渡邊 舞. (2019). 保育者養成課程で学ぶ「専門学校生」の実習前後の想いと自己成長感に関する研究. 豊岡短期大学論集. 16, 59-68.

### 参考文献

- 1) 渡邊 舞. (2017). 保育者養成課程で学ぶ「専門学校生」は実習に対してどの様な不安を感じているのか；実習不安尺度の作成と自己効力感の関連. 豊岡短期大学論集. 14, 349-356.
- 2) 渡邊 舞・井口美和. (2018). 保育者養成課程で学ぶ「専門学校生」の不安と自己成長感に関する研究；1年次と2年次調査による考察. 豊岡短期大学論集. 15, 127-136.

### 謝 辞

本研究は、せいとく介護こども福祉専門学校の全面協力を受け実施いたしました。厚く感謝申し



上げます。また、調査に参加して下さった学生の皆様には多大なご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

